“Benito Cereno” は英語翻訳小説だろうか

藤 本 幸 伸

Is “Benito Cereno” a Novella Translated into English?

FUJIMOTO Yukinobu

(Received September 27, 2013)

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の中編「ベニト・セレノ（“Benito Cereno”）」は、1855年、『パットナム誌（*Putnam's Monthly Magazine*）』の10月・11月・12月の各号に連載され、その後『ピアザ物語（*The Piazza Tales*）』の一編として出版された。この中編は、「バートルビー（“Bartleby, The Scrivener”）」や「ビリー・バッド（“Billy Budd, Sailor”）」ともにメルヴィル中短編の代表作の一つで、黒人奴隷反乱の物語ということもあり、様々な研究がされてきた。この中編の特徴の一つは、実在のアメリカ人船長アメイサ・デラノ（Amasa Delano）の航海記録、*A Narrative of Voyages and Travels*（1817）の第18章、デラノ船長が当事者となったスペイン船トライアル号（the Tryal）での黒人奴隷反乱を下敷きにして書かれているという点である。実際の奴隷反乱記録をメルヴィルが読み、「ベニト・セレノ」という物語に「翻訳」していった。まず、デラノ船長の航海記録に書かれた実話を紹介しておこう。

1805年２月20日水曜日、明け方６時頃、チリのサンタ・マリア島沖に停泊していたデラノ船長の前に、帰属旗も掲げずに近づいてくる一艘の船があった。デラノ船長がこの国籍不明の船に乗り込むと、甲板は黒人奴隷で溢れ、見るからに船は荒れた状態であった。水夫や黒人奴隷から様々な苦境を訴えられ、彼らを憐れに思ったデラノ船長は、自分の船にある食料を運び入れ、また飲み水の調達を指示する。そしてベニト・セレノ船長（Benito Cereno）から、トライアル号はアルゼンチンのブエノスアイレスからペルーのリマに行く途中、嵐に遭遇し大半の水夫が死んでしまったこと、水夫がいないために帆の補修ができず傷んだままだということ、沈没を防ぐために積載の荷物の大半を捨てたことなどが知らされる。このような災難の話をしているにも拘わらず、セレノ船長は意図的にデラノ船長を無視するような態度をとる。そして食料や飲み水を運び終わり、デラノ船長がトライアル号を後にしようとしたその時、セレノ船長が自分のボートに飛び込んでくると、スペイン人水夫たちがトライアル号から次々と海に逃げ出し始める。そしてセレノ船長から、黒人奴隷が反乱を起こし、スペイン人水夫の大半を殺害して、アフリカのセネガルに連れてくよう脅迫されていたことを知らされる。反乱奴隷を乗せたトライアル号は、その間に逃走する。デラノ船長は、トライアル号の拿捕と交換に積み荷の半分の利益を権利として要求し、それをセレノ船長も確認する。デラノ船長の指示によって、トライアル号は、無事、拿捕される。ところが、トライアル号に乗船したスペイン人水夫たちやセレノ船長までもが黒人奴隷に暴力を振うのを見て、デラノ船長は慌てて制止する。上陸後もセレノ船長は、デラノ船長は海賊だと主張し、救出してもらった恩義を忘れ、デラノ船長が当然要求できる報奨金の支払いを渋る。デラノ船長は、このような自分の経験を航海記録とし

て記載した後、この奴隷反乱の経緯の公式の記録、裁判での証言記録を転載する。元々スペイン語通訳を通して行われた裁判の記録を、公式に英語に翻訳したものである。デラノ船長はスペイン語を話すことができるのだが、証言にたった候補生のナサニエル・ルーサー（Nathaniel Luther）はスペイン語ができないので、デラノ船長も一緒にスペイン語通訳を通じて証言が行われることになる。しかし、このスペイン語通訳は、デラノ船長に言わせると、“a bad linguist”（*Melvill's Short Novels* 210; 以下 *MSN*）であったため、公式に翻訳された裁判記録であるが、辻褄の合わない所や不明瞭な表現があることは容赦願いたいということになる。

以上の実際のデラノ船長の話を、メルヴィルがどのように書き換えたか、実話と「ベニト・セレノ」との異動がよく取り上げられる。大きな違いとして、時代設定が1805年から1799年に変更されたこと、船の名前がデラノ船長の船、パシビアランス号（the Perseverence）がバチャラーズ・デライト号（the Bachelor's Delight）に、トライアル号がサン・ドミニク号（the San Dominick）に変更されたこと、奴隷反乱首謀者の名前をムレ（Mure）からその父親の名前バーボ（Babo）に変更したこと、実際は節操なきセレノ船長をバーボの悪意の計画に打ちひしがれる人物に変更したこと、14,000語の航海記録を約2.5倍の34,000語にまで膨らませたことなどが挙げられる。

だが、本稿では、メルヴィルが意図的に書き換えた箇所ではなく、メルヴィルが意図的に変えなかった所を取り上げたい。メルヴィルの改変箇所、例えば、トライアルから書き換えたサン・ドミニクという固有名は、カトリックのドミニコ派の異端審問やサン・ドミンゴでの奴隷反乱を容易に連想させ、バーボを中心とする奴隷反乱に、プロテンスタント対カトリックの教派対立という宗教の次元の読みを可能にする。このような改変箇所にメルヴィルの意図を読み込んでいくのは、ある意味で当然であるし、この作品解釈に歴史的な奥行きと社会的な広がりを与えている。この書き換えに劣らず重要な点として、メルヴィルが意図的に変えなかったところに注目したい。つまり、デラノ船長とセレノ船長、および反乱首謀者のバーボは、サン・ドミニク号上ではスペイン語を使っていたという点である。ある意味、わかりきったことなので、誰も注目しなかったのだろうが、デラノ船長、セレノ船長、そしてバーボがスペイン語で会話をしていたとすると、メルヴィルはデラノ船長の航海記録からスペイン語で取り交わされたであろう会話を英語に復元翻訳したことになる。原典に当たるデラノ船長の航海記録から、デラノ船長、セレノ船長、そしてバーボといったサン・ドミニク号上での出来事を想像力で再構成し、その出来事を原典の約2.5倍に膨らませた翻訳小説がこの「ベニト・セレノ」なのだ。

では、この物語はどのような意味で翻訳小説と言えるのだろうか。翻訳を、原文からその言語文化の読者が受け取るだろう言語経験と等価の言語経験を別の言語に移し替える行為としておくなら、「ベニト・セレノ」は、サン・ドミニク号上の出来事とその後の裁判の記録というスペイン語による言語経験をメルヴィルが等価と見なした英語の言語経験に移し替えた物語と言えるだろう。「ベニト・セレノ」を翻訳小説と捉える場合、通常の翻訳と異なるのは、スペイン語で取り交わされたであろうサン・ドミニク号上の出来事を記したスペイン語原典が存在しないということと、更に原典の代わりとなるデラノ船長の航海記録そのものが、スペイン語で取り交わされたであろう経験の当事者による翻訳だということである。更にスペイン語で行われた裁判記録も、英語からスペイン語通訳を通じてスペイン語に変換され、それを更に英語に翻訳した記録である。その意味で、メルヴィルの「ベニト・セレノ」は、何重にも翻訳をへた翻訳小説ということになる。

原典重視という見方からすると、このような重訳は、如何にも不純、混じりけの多いテクス

トと見なされやすいが、聖典といわれる書物は悉く重訳であったことを思い出してみてよいだろう。キリスト教の聖典は、ヘブライ語からギリシャ語に、それからラテン語に翻訳され、更にドイツ語や英語などの各国語に翻訳されていき、その各国語の読者は自分たちの言葉を通って聖書の世界を理解していった。仏教の聖典もまた、サンスクリット語から漢文、漢文訓読、そして口語文と翻訳を繰り返していきながら、日本の読者に届けられた。「ベニト・セレノ」は、作者メルヴィルの手になる聖典テクストと言えば大げさかも知れないが、翻訳小説として見なすことの違和感は少なからず取り除けるはずである。

「ベニト・セレノ」を翻訳小説と見なすこととして、まずは、この物語がこれまでどのような批評的関心で読まれてきたのかを簡単に振り返り、次に、デラノ船長の航海記録と「ベニト・セレノ」の両方のテクストからスペイン語に言及する箇所を確認する。(紙数の関係で分析の途中にならざるを得ないのだが) 最後に、デラノ船長の航海記録との異動箇所から一部を取り上げ、メルヴィルがサン・ドミニク号上での使用言語をスペイン語から英語に翻訳した意図を探っておきたい。

これまで積み重ねられてきた「ベニト・セレノ」批評をまとめることは不可能に近いが、あえてまとめれば、この作品の批評は次のように分類できるだろう。

1) バーボは、自身献身的な奴隷として振る舞い、奴隷反乱の隠蔽を計画し、セレノ船長を自由に操る。奴隷反乱を鎮圧する楽天的なデラノ船長と対照的に、奴隷反乱を産んだ奴隷制の非人道さに罪意識を感じ、また黒人奴隷に自由に操られたことに打ちひしがれるセレノ船長。そして、反乱首謀者バーボを悪の化身と見なし、その悪意に人間の堕落を見る。
2) デラノ船長に善良無垢なアメリカを代表させ、セレノ船長を狡猾なヨーロッパの象徴に見立てて、無垢なる自然の新世界と腐敗した文明の旧世界の対立というアメリカ的テーマを読み込む。
3) バーボは献身的な奴隷というステレオタイプな黒人像を持つデラノ船長は、表層の芝居に騙され、真相の奴隷反乱を洞察できない。その無頓着さを、南北戦争という国民同士の殺し合いへとアメリカを巻き込んでいく奴隷制度や逃亡奴隷法などの非人道的制度への無関心に置き換え、そこにメルヴィルのアメリカ批判を読み込む。
4) 19世紀の大衆文化ミンストレル・ショーでは黒人に扮した白人が、自ら滑稽で間抜けな黒人を演じ黒人を劣位にまで貶め、白人の人種的優越を保証する娯楽であった。黒人バーボが白人セレノを思うままに操る事態は、このミンストレル・ショーを反転させたことに等しく、このバーボの奴隷反乱隠蔽計画に白人優越主義および植民地主義の転覆を読み込む。

以上が、「ベニト・セレノ」批評の大きな傾向で、1) 現象世界 (appearance) の背後に真相が隠されているといったアメリカルネサンス的世界認識を元にした読み方、2) のようにヘンリー・ジェームズに連なる「無垢な自然のアメリカが成熟腐敗したヨーロッパ文明を救済する」といったアメリカのナショナリズムのテーマや、3) のアメリカ特有の奴隷制を巡る言説を新歴史主義的に分析する読み方もあれば、4) のようにアメリカの大衆文化を掘り起こしポストコロニアル批評を試みる読み方もある。またこの物語は、サン・ドミニク号上では何が起こったのか、セレノ船長は何を隠しているのか、デラノ船長は秘密を見抜けるのかといったサ

スペンスの物語構成を持っていることから、このようなサスペンスの構成と奴隷であった黒人が白人の目をかいくぐる際の戦略とが類似性していることに注目し、この物語の深層にメルヴィルの人種やジェンダー意識を読み込む批評もある。

この「ベニト・セレノ」批評史を見てもわかるように、「ベニト・セレノ」を翻訳の観点から読む試みはこれまでなかった。まずデラノ船長の航海記録から、デラノ船長本人、セレノ船長、および黒人奴隷たちがスペイン語を使っていたことに言及する箇所を抜き出しておこう(以下の引用の強調はすべて引用者による)。

【裁判で使われた言語とデラノ船長のスペイン語能力】

① The following Documents were officially translated, and are inserted without alteration, from the original papers. ... My deposition and that of Mr. Luther, were communicated through a bad linguist, who could not speak the English language so well as I could the Spanish language. The Spanish captain's deposition, together with Mr. Luther's and my own, were translated into English again, as now inserted; having thus undergone two translations. (*MSN* 210)

【セレノ船長の証言】

② [The negro named Jose] was the man that waited upon his master Don Alexandro, who speaks well the Spanish, having had him four or five years; a mulatto, named Francisco, native of the province of Buenos Ayres ...; a smart negro, named Joaquin, who had been for many years among the Spaniards. (*MSN* 212)

③ To draw up a paper, signed by the deponent, and the sailors who could write, as also by the negroes, Babo and Atufal, who could do it in their language. (*MSN* 215)

④ The negro Mure, who is a man of capacity and talents, performing the office of an officious servant, with all the appearance of submission of the humble slave, did not leave the deponent one moment, in order to observe his actions and words; for he understands well the Spanish, and besides there were thereabout some others…who understood it also.... (*MSN* 216)

⑤ [The deponent] instantly told the captain (Amasa Delano), by means of the Portuguese interpreter, that they were revolted negroes, who had killed all his people. (*MSN* 216)

【デラノ船長の証言】

⑤ [Benito Cereno] then told him that the negroes of the Tryal had taken her, and had murdered twenty-five men, which the deponent was informed of through the medium of an interpreter, who was with him, and a Portuguese. (*MSN* 220)

【ルーサーの証言】

⑤ [W]hen the Spanish captain jumped into it, and when the Portuguese declared that the negroes had revolted. (*MSN* 222)

英語による証言をスペイン語に通訳し、それを更に英語に翻訳したという二重に翻訳されたのがこの裁判記録だったということは、裁判がスペイン語で行われたことを示していよう。更にセレノ船長の証言にもあるように、トライアル号の黒人奴隷の多くがスペイン語を理解できた。言い換えると、黒人奴隷たちが反乱を起こせたのは、彼らがスペイン語を使えたからだ。スペインの植民地において、スペイン語は白人に仕える少しでも奴隷の立場をよくするための道具であると同時に、その白人支配を転覆させる武器でもある。黒人奴隷は白人の言葉スペイン語を理解できるれば、白人にとって有用な道具となる、しかしこの理解能力はまた白人たちを理解し白人の裏をかくことも可能にする。支配言語の理解は、時にその支配を転覆させる力ともなり得るのだ。

ところがこのような支配言語の理解がいつも被支配者側に有利に働くとは必ずしも言えない。白人に従順な奴隷を演じる反乱の中心人物で、セネガル出身のムレは、スペイン語をよく理解した。セネガル出身の黒人奴隷はアフリカの言語とスペイン語の二言語使用者なのだが、ブエノスアイレス出身のフランシスコ（Francisco）は同じ黒人でもスペイン語しか話せない。同じ黒人奴隷という境涯でありながら、言語能力の差が疎外を産むことになる。この疎外を回避しようとすれば、黒人奴隷同士でも、他者の言語であるスペイン語を共通語として使うほかない。この支配者言語であるスペイン語の使用はまた、奴隷たちの自己解放の試みが抑圧者側に知られてしまうことを意味する。セレノ船長が、黒人奴隷たちに悟られないように、奴隷反乱であることをデラノ船長に伝えようとするとき、支配者言語でありかつ自国語でもあるスペイン語を捨て、他者の言語であるポルトガル語を使わざるを得なかったことは、植民地支配における共通言語の破壊的力をよく示しているだろう。

では、スペイン語、アフリカの言語、英語、ポルトガル語といった多言語社会のトライアル号上でスペイン語が共通語である状況を、メルヴィルは「ベニト・セレノ」でどのように表現しているのだろうか。デラノ船長の航海記録と対応する箇所を抜き出しておこう（引用につけたの番号は、デラノ船長の記録との対応を示す。また、引用の強調はすべて引用者による）。

Rudely painted or chalked ... along the forward side of a sort of pedestal below the canvas, was the sentence, "Seguid vuestro jefe" (follow your leader). (*MSN* 37)

① Captain Delano sought, with good hopes, to cheer up the strangers, feeling no small satisfaction that ... he could—thanks to his frequent voyages along the Spanish main—converse with some freedom in their native tongue. (*MSN* 40)

While Captain Delano stood watching him, suddenly the old man threw the knot towards him, saying in broken English—the first heard in the ship. (*MSN* 63)

① Captain Delano advanced to the forward edge of the poop, issuing his orders in his best Spanish. The few sailors and many negroes, all equally pleased, obediently

set about heading the ship towards the harbor. (*MSN* 79)

⑤ while the Spaniard, half-choked, was vainly shrinking away, with husky words, incoherent to all but the Portuguese. (*MSN* 85)

① The following extracts, translated from one of the official Spanish documents, will, it is hoped, shed light on the preceding narrative. (*MSN* 89)

[Benito Cereno declared] that the negroes Babo and Atufal held daily conferences, in which they discussed what was necessary for their design of returning to Senegal, whether they were to kill all the Spaniards, and particularly the deponent. (*MSN* 92)

③ [Benito Cereno] agreed to draw up a paper, signed by the deponent and the sailors who could write, as also by the negro Babo, for himself and all the blacks. (*MSN* 94)

④ [T]he negro Babo understands well the Spanish; and besides, there were thereabout some others who ... likewise understood the Spanish. (*MSN* 96)

確かにサン・ドミニク号上でも、片言の英語を話す者もいし、デラノ船長の乗組員にはポルトガル語を理解するものいる。だが、メルヴィルのテクストでは、サン・ドミニク号は多言語社会ではなく、デラノ船長が自分のスペイン語能力に度々言及するように、スペイン語の単一言語社会だと言えそうだ。それはバーボを筆頭に、アトゥファルや黒人少年までもがスペイン語を理解するように描かれているし、なによりバーボとアトゥファルの日々の協議をセレノ船長が理解できたのは、彼らがスペイン語を使っていたからだろう。このようにサン・ドミニク号上の言語使用に目を向けると、メルヴィルは英語翻訳によって多言語社会を単一言語社会へと変換しようとしたと言えるのではないか。

先に翻訳の定義、原文からその言語文化の読者が受け取るだろう言語経験と等価の言語経験を別の言語に移し替える行為という観点から、メルヴィルによる多言語社会の単一言語社会化の意図を探ってみよう。確かにトライアル号上ではスペイン語、アフリカの言語、英語、ポルトガル語が使用されているが、メルヴィルはこの多言語使用にスペイン語という支配言語の権威を揺るがす力を認めていなかったのではないだろうか。セレノ船長が奴隷反乱を暴露するためにスペイン語の代わりに頼ったのが、南米での支配言語であるポルトガル語であった。この言語シフトは、一つの支配言語からもう一つの支配言語に移行しただけで、植民地支配の構造に変化はない、そう翻訳家メルヴィルは判断したのではないだろうか。先の翻訳の定義を応用するならば、トライアル号上の多言語使用という言語経験と等価の言語経験を英語文化に移し替えようとすると、英語の単一使用という言語経験がそれに対応するとの判断だったのだろう。メルヴィルにこのような判断をさせたとすれば、アメリカにおける英語の単一言語経験がまさしく、黒人やネイティブ・アメリカンを支配する権威の現れだからであろう。

このような英語という単一言語社会の構造は、ミンストレル・ショーといった大衆文化がもつ白人文化優位の構造と相似の関係をもっているし、南部の黒人奴隷が北部に逃亡する際、そ

の逃亡の成否を別けたのがまさしく、白人と同じ英語をはせるかどうかという英語能力であったことと考え合わせれば、メルヴィルの多言語から単一言語への翻訳は支配構造の移し替えという点で、まさしく等価と言えるだろう。

今回は、紙数の都合で、「ベニト・セレノ」という中編はメルヴィルによる翻訳小説ではないかという問題意識の一端しか扱えなかった。しかし、この中編を翻訳として読み返すことで、新たな読みが可能となるはずである。次は、デラノ船長の記録と同じ場面を、メルヴィルは「ベニト・セレノ」でどのような等価表現に変換しているかを検討して見ることにする。

【参考文献】

Bassnett, Suan and Harish Trivedi. (1999) *Post-colonial Translation: Theory and Practice.* London and New York: Routledge.

Cheyfitz, Eric. (1997) *The Poetics of Imperialism: Translation and Colonization from The Tempest to Tarzan.* Expanded Ed. Philadelphia: U. of Pennsylvania P.

Melville, Herman. Ed. By Dan McCall. (2002) *Melville's Short Stories.* New York: W. W. Norton & Company.

Newman, Lea Bertani Vozar (1986) *A Reader's Guide to the Short Stories of* HERMAN MELVILLE. Boston, Mass.: G. K. Hall & CO.

Richards, Jason. (2007) “Melville's (Inter)national Burlesque: Whiteface, Blackface, and “Benito Cereno”” *American Transcendental Quarterly* 21: 73-94.

Richardson, William D. (1987) *Melville's “Benito Cereno” : An Interpretation with Annotated Text and Concordance.* Durham, North Carolina: Carolina Academic Press.

Robinson, Douglas. (2011) *Translation and Empire: Postcolonial Theories Expanded.* Manchester, UK & Kinderhook, USA: St. Jerome Publishing.

Stuckey, Sterling (2009) *African Culture and Melville's Art: The Creative Process in* Benito Cereno *and* Moby-Dick. Oxford: Oxford UP.

Stuckey, Sterling and Joshua Leslie. (1988) “Aftermath: Captain Delano's Claim against Benito Cereno” *Modern Philology* 85: 265-287.

早川敦子　(2013)『翻訳論とは何か　翻訳が拓く新たな世紀』 彩流社